



Cornell University

2022年12月 馬淵祐太

船井情報科学振興財団 第12回報告書

Cornell University、Department of Neurobiology and Behavior に所属し、神経科学を専攻している Ph.D.6年目の馬淵祐太です。前回の報告書を提出してから4カ月ほどしか経過していませんが、ようやく論文を書き終え、submitできる段階になりました。

1. 日常生活について

日常生活に関しては特に真新しいことがないというのが本音ですが、以前からジムで知り合いになっていた人たちと一緒に筋トレをするようになりました。ジムで毎朝会っていたことがきっかけで話すようになり、生活リズムや趣味が似ているのもあって急激に仲良くなりました。これまでCornell学内の人々と接するばかりで、地元の人たちと接する機会がほとんどありませんでしたが、自分とは全く異なる仕事の話の聞くだけでも非常に新鮮で楽しいです。

所属している研究室は僕が入学する1年前にできた割と新しめの研究室なので、指導教官にとって僕が最初の学生のうちの1人になります。指導教官の性格はかなり明るく社交性があるのですが、これまでの5年間研究室メンバーはあまりソーシャルな感じではなく、研究室内ではたくさん話しをしていたものの、みんなで飲みに行く機会は年に数回ほどでした。自分は生活リズムが極端に朝型で、夜更かししたくなかったので、居心地は非常によく全く問題なかったのですが、ここ1、2年で研究室に入ったメンバーが非常に社交的なので、研究室外でラボメンバーと交流することが一気に増えました。ここ数カ月で、バーや食事に行くことのほかに、リンゴ狩り、ハイキング、泊りがけのラボトリートなどいろいろなイベントがありました。ここ最近では実験の他に論文の執筆に追われていて、デスクワークが増えストレスが溜まっていることが多かったため、良い息抜きになった他、新たに研究室に入ったメンバーとも仲良くなることができましたので、よかったと思っています。研究室の初期メンバーとして、あまりソーシャルでない研究室の雰囲気を作り出した一因は自分にもあると思いますが、研究室の雰囲気の変遷を見るのは面白いです。

2. 研究生活について

今学期はPh.D.を始めてから一番といえるほどストレスが多い時期でした。ほぼすべての大学院生が経験することだと思うので決して特別なことではないですが、論文、実験、データ解析に忙殺される日々でした。論文の執筆にあたって指導教官と議論（あるいは口論）をしつつ、論文用のFigureを作ったり、原

稿を修正したりすることを繰り返しました。自分が書いた元の原稿はもの見事に訂正されてしまいましたが、指導教官が訂正した原稿と自分のものを比較することで、論文の執筆の仕方を少しは学ぶことができたと思っています。冒頭にも書きましたが、論文を書き終え、ジャーナルに投稿する前に複数の研究者にコメントを依頼しました。全員から返答が返ってきたのでそれらのコメントやフィードバックを参考にして再度原稿を修正している段階です。近いうちに論文を投稿できるはずですが、実験データはすべて揃っていなかったものの、論文の原稿自体は2年以上前から書き始めていたので、ようやく論文の投稿が近いことは非常に嬉しいです。来学期以降は、もしあれば論文のrevisionの実験を行いつつ卒業論文を書くことになると思います。

3. 最後に

COVID-19に加えてインフルエンザの感染者数が周りで出ている状況ですが、皆さんが健康にお過ごしできればと思います。最後になりましたが、常日頃よりご支援頂いている船井情報科学振興財団に感謝致します。